

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20500869

研究課題名（和文） スターリニズムと心理学

研究課題名（英文） Stalinism and Soviet psychology

研究代表者

国分 充 (KOKUBUN MITSURU)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：40205365

研究成果の概要（和文）：

スターリン時代、心理学はロシアを代表する大学にもその講座はなく、また、代表的な研究雑誌もないという状況にあった。そうした心理学の運命を、精神分析と児童学・精神工学を取り上げ、概観した。また、その時代の心理学者として、数々の危機を生きのびた精神分析学者・心理学者ルリヤと、粛清に消えた精神工学者イサク・シュピールレインを取り上げ、その生涯を見た。

研究成果の概要（英文）：Soviet psychology in the Starlin's era was severely suppressed. There was no department in Soviet university and no journal was published. To follow the trace of Soviet psychology, Psychoanalysis, pedology and mental engineering were surveyed. Further, the life of two Soviet psychologists, Luria and Issac Spielrein, the former survived several crises and the latter was purged, were investigated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：障害児の心理学

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史

キーワード：スターリン、ソビエト心理学、精神分析、児童学、精神工学、ルリヤ、シュピールレイン

## 1. 研究開始当初の背景

ソビエト・スターリン期に干渉を受けた学問としては、政治思想と直接に関わってくる哲学及び歴史学のほか、ルイセンコ学説が支配した遺伝学、マルによるヤフェト言語学は

よく知られ、研究もよくなされているのに対し、心理学は注目されることはあまりない。しかし、心理学は強い干渉を被った学問の一つである。それを物語る例を挙げれば、ロシアを代表する大学であるモスクワ大学は

1931年心理学講座(1907年設立)を廃し、心理学教育を中止している。また、全国的な心理学関係の学術雑誌は1930年代に相次いで発行を停止されている。この後、モスクワ大学が心理学科を再建するのは1942年で、10余年もの間ソビエトを代表する最高学府には心理学科がないという状態であった。さらに、1950年にはいわゆるパブロフ会議で多くの心理学者は厳しい自己批判を求められ、この後ソビエト心理学はパブロフ学説に基づいて構築していくことが要求されるようになる。こうした経緯を経てはじめて学術雑誌の刊行が認められ、ようやく1955年に、ロシアを代表する心理学雑誌“Вопросы Психологии(心理学の諸問題)”誌が発行されるに至る。かくのごとく苦難の道を歩まざるを得なかった心理学なのであるが、しかし、その実態は、先にも述べたように知られておらず、また、十分な研究もなされていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、ソビエトにおいてスターリンが権力を奪取していく1920年代中ごろから権力を確立していく30年代までのソビエトにおける心理学に注目し、心理学界の動向を通史的に見ていく他、当時の心理学界を代表する人物の活動・置かれた状況等を調べ、スターリニズムと心理学の関わりを明らかにすることを目的としている。

## 3. 研究の方法

心理学会の動向を見るためには、精神分析、児童学、精神工学を取り上げ、その盛衰を見る。心理学者としては、ルリヤ及びイサク・シュピールレインを取り上げる。

## 4. 研究成果

### (1) 概観

ボリシェヴィキ政府は、きわめて知性の高い理想に溢れた人々によって構成されており、革命当初の興奮と高揚の中で、彼らが、夢見たことは、新しい人間の育成・形成であり、共産主義の人間の創出であった。革命は、政治だけの問題ではなく、人間の問題であったのである。一方、心理学は、学の独立から約半世紀にして、はや行きつくところまで行っていた。すなわち性欲をもその射程にとらえ、それを中核としたフロイトの発達理論が登場していた。こうした中で、政府は、科学的理論の実践(政策立案、政策実行)への応用をためらわず、国立の精神分析研究所を設立し、精神分析理論に基づく養育施設(子どもの家)をつくっていった。そして、心理学は政策科学的性格を有し、それを強めていった。

この状況は20年代半ばに変化する。政治ではトロツキー批判が激化し、心理学では、精神分析の批判が強まっていく。これは、政

府内における精神分析の最大の理解者がトロツキーであったということからすると当然でもあった。トロツキーの没落と歩調を合わせて精神分析は凋落し、この中で、生き残った心理学の潮流が児童学であり、精神工学であった。児童学は、子どもの保護・育成を助けることに特化・専門化した学問であり、精神科学は労働科学の一つで、政策(行政)科学的な性格を強く有していた。また、それゆえにこそ、これらの動向は、行政批判(ひいてはスターリン批判)を含み得るものであった。それは例えば実態を明らかにすることすら危険なこととなり得たのである。そうしたものの辿る運命は、スターリニズムの浸透の中では明らかで、1936年には、いずれの潮流も死亡宣告をつきつけられることになるのである。

## (2) 心理学諸潮流の動向

### ① 精神分析

ソビエト・ロシアの精神分析は革命初期には政府首脳トロツキーの理解の下で次代の子どもの発達を理解する主要な理論として位置づけられていた。国立の精神分析研究所が設置され、附属施設として実際に子どもがそこで生活する“子どもの家”もつくられた。そこには政府高官の子弟、例えばスターリンの息子もいたと言われている。以上、ソビエト・ロシアの精神分析が政府ときわめて近い政策科学であったことは明らかである。しかし、この精神分析は、トロツキーと運命をとる。すなわち、20年代半ばから衰え始め、30年代に入って活動を停止する。ソビエト・ロシアの精神分析の軌跡を大雑把に時期区分するなら次のようである。

1)1921-1922 協会草創期

2)1922-1923 二協会(モスクワとカザン)並立期

3)1924-1925 繁栄期

以上、1921年から1925年の発展期

4)1925-1926 ルリヤ事務局長期

5)1927-1930 シュミット事務局長期

以上、1926年から1930年の衰退期

また、ソビエト・ロシアの精神分析の主たる出来事を年代とともに整理すると以下のようである。

- ・1921 芸術創造性研究会結成(エルマコフ)
- ・1922 ロシア精神分析協会結成(モスクワ、会長エルマコフ)、カザン精神分析協会結成(カザン、書記ルリヤ)
- ・1924 ルリヤらモスクワへ、ザビーナ。シュピールレインも参加、エルマコフ会長を降り、後任はヴルフ、ルリヤは事務局長に、国立精神分析研究所の活動活発化、“マルクス主義の旗の下に”誌に“弁証法的唯物論の視点からフロイト及びフロイト主義のマルクス主義の哲学批判を緊急な課題のひ

とつ”とする見解が載る

- ・1925 マルクス主義と精神分析の関係をめぐ  
る議論活発化
- ・1927 ルリヤ事務局長降る、後任はシュミ  
ット
- ・1928 ヴルフ会長を降る、後任はカンナビ  
フ
- ・1930“国際精神分析協会誌”（独語）にロシ  
アの精神分析協会の最後の報告が載る

## ② 児童学及び精神工学

児童学と精神工学とは、ほぼ同じような軌跡をたどった。すなわち、20年代後半から特に盛んとなったが、30年代になると、運命は反転する。その契機となるのは、1930年“プロレタリア革命”誌第6号に掲載された雑誌編集部に当たったスターリンの手紙“ボリシェヴィズムの歴史の若干の問題について”であるが、それは、同じ年の1月25日全ソ連邦共産党中央委員会決定“「雑誌マルクス主義の旗の下に」について”やその前年12月9日のスターリンと赤色教授養成学院共産党細胞との対話などでからもうかがえることであった。2つの心理学の潮流は、1936年7月4日付けの共産党中央委員会決定“教育人民委員部の系統における児童学的偏向について”（いわゆる“児童学批判”）によって命運を絶たれることになる。そこに至る経緯を以下に示す（精神工学については、松野（2011）がコリツオワ（1990）、ノスコワ（1995）などの論文によって報告した資料に主に基づくものである）。いずれの潮流も、20年代後半に没落していった精神分析と交代するかのようソビエト・ロシアの心理学界に登場し、やはり同じように政権の重要人物と深い関係を有しつつ（児童学はブハーリン（クループスカヤも）、精神工学についてはトロツキー（及びレーニン）、そうした人物がスターリンと対立して失脚していくにつれて没落していくという運命をたどっていることがわかる。こうしたこともこれらの心理学の潮流が、応用科学ゆえの政策科学的性格を強く帯びていたことを物語るものであろう。

### ソビエト児童学の軌跡

- ・1924 未成年者の社会的権利保護第2回大会
- ・1927・12・27-1928・1・4“第1回全ソ連邦児童学大会”（教育人民委員部国家学術会議議長ポクロクスキー病欠席のためブハーリン演説する）
- ・1928・1・26 第1回児童学大会の総括に関する教育人民委員部参与会決定
- ・1930 教育人民委員部及び保健人民委員部参与会決定“共和国における児童学活動の組織化について”
- ・1931・3・7 ロシア共和国人民委員会議決定“共和国における児童学的活動の組織化に

ついて” 4・6 ロシア共和国大衆施策セクター命令 480/89号“浮浪児の間での児童学＝教育活動について” 5・6 教育人民委員部決定“国民教育部の系統における児童学活動の組織化について”、その他、“地区児童学カビネット令”も出される

- ・1933・5・7 教育人民委員部参与会決定“児童学活動の状況と課題について”
- ・1934・4・6 教育人民委員部通達“学校における児童学者の活動について”
- ・1935・1・15 ロシア共和国教育人民委員部命令“学校における訓育活動の強化について”
- ・1936・7・4 共産党中央委員会決定“教育人民委員部の系統における児童学的偏向について”（いわゆる“児童学批判”）
- ・1937・4・5-4・16 第1回全ロシア教育科学協議会（児童学総括）

### ソビエト精神工学の軌跡

- ・1921 第1回科学的労働管理[NOT]全ロシアカンファレンス（モスクワ）
- ・1923“プレーミヤ”連盟発足（名誉会長レーニン、トロツキー）、ソ連邦労働人民委員部附属精神工学ラボを組織（のちにモスクワ国立労働保護研究所の一部門となる）
- ・1924 第2回科学的労働管理[NOT]全ロシアカンファレンス
- ・1925 心理学研究所に精神工学セクションをつくる
- ・1927 労働精神生理学と職業選択に関する第1回全ソ連邦代表者会議（モスクワ）を組織、ここで学会設立決議
- ・1928 全ロシア精神工学と応用精神生理学協会結成（支部は、モスクワ、レニングラード、ボロネジ、ロストフ・ナ・ドヌー、スヴェルドロフスク（エカチェリンブルク）、ニジニ・ノブゴロド（ゴーリキー市）、サラトフ、カザン、その他ウクライナ（ハリコフ）、中央アジア等）“労働の精神生理学と精神工学”誌刊行、編集主任をつとめる（のちに“ソビエト精神工学”に改名し1934年まで刊行、1935年刊行中止）
- ・1931・5 精神工学・応用精神生理学協会の第1回全ソ連邦大会 9 第7回国際精神工学会（モスクワ）（革命後初めて外国人を招くもの、ちなみに第4回（1927、パリ）、第5回（1928、ユトレヒト）、第6回（1930、バルセロナ））
- ・1935（1・26 イサク・シュピールレイン逮捕）“ソビエト精神工学”刊行中止

### (3) 心理学者の運命

#### ① ルリヤ（1902-1975）

革命からスターリニズム期を生きのびた世界的に著名な（神経）心理学者ルリヤについて見る。ルリヤには、ソビエト時代に UCSD

の Cole 教授の勧めで書いた自伝が知られていたが (1979 年)、Cole は、ソビエト崩壊後の 2006 年、ソビエト時代には当局の検閲のために書けなかったこと等を加筆した彼の自伝を再度出版した。この彼の二種の自伝の比較を、2009 年に我々が行った Cole へのインタビューを踏まえつつ、行った。新たに記されていたことは以下のものである。① 20 年代のエイゼンシュテインとの深い親交。② 20 年代後半の精神分析批判は前書に記したよりもっと深刻であったこと。③ 30 年代の中央アジア探検は農業集団化と結びついている (と書かれている) こと。④ 30 年代半ばの双生児研究に係わっては、粛清された医学生物学研究所所長レヴィットの側にあったこと。⑤ 医学部への入学に関しては、ヴィゴツキーがルリヤの父に、ルリヤを公の場から隠せと強く迫ったがゆえであったこと。心理学的テストに反対する布告 (児童学批判か) が出されルリヤはそのターゲットの一人であったこと。⑥ 1950 年に神経外科研究所を失職したのは、反ユダヤ運動たる“コスモポリタン批判”によること。⑦ 1952 年、いわゆるパブロフ会議で十分にパブロフ的でないとして批判されたこと。⑧ “ユダヤ医師団事件”では、逮捕は時間の問題と覚悟し、ルボフスキーによれば、朝夕出勤と退勤を一緒にし、それは逮捕されても家族にそれを伝えてもらえるようにと考えてのことであったこと。以上、ルリヤは、児童学批判、コスモポリタン批判、パブロフ会議、ユダヤ医師団事件という、関連する知識人を巻き込んだいずれの事件でも逮捕粛清の危機にあったことがわかったが、いずれでも紙一重で切り抜けている。それを可能した要因・条件についての検討は今後に残されている。ルリヤの自伝及び心理学史家ボーリングの求めで書いた自伝 (1974) に記述されていた主要な点を年代とともに記すと以下のものであり、これらには 2006 年に Cole が記したような諸事実は確かに書かれていない。

- ・ 1917 革命当時 15 歳
- ・ 1918 ギムナジウムを短期コースで修了、後にカザン大学へ
- ・ 1921 カザン大学卒業人文学の学位を得る、その後カザン大学医学部に入学、しかし、1936 迄修了せず。
- ・ 1923 モスクワ心理学研究所長コルニコフに呼ばれてモスクワ大学心理学研究所に勤務。クルプスカヤ共産主義アカデミーでも教育・研究に従事。
- ・ 1924 ヴィゴツキーとの出会い、ヴィゴツキー、モスクワへ
- ・ 1920 年代終りに医学の勉強を再開 (ヴィゴツキーも同様)
- ・ 1930 年代初め ウズベク行き、ハリコフの

ウクライナ精神神経学アカデミー心理学センター設立、3 年間勤務、双子研究着手 (モスクワ遺伝 - 遺伝研究所で)

- ・ 1934-1936 モスクワ医学研究所遺伝学部門で発達心理学を研究
- ・ 1936 神経外科研究所 (後のブルデンコ神経外科研究所) で神経心理学研究室設立、局所的な脳損傷の研究のための神経心理学的方法の開発に取りかかる。教育科学 (心理学) 博士、1936 まで医学部学生の上重生活
- ・ 1937 第一モスクワ医学学校卒業し、ブルデンコ神経外科研究所へ (1937 - 1941 神経心理学に最初に取り組んだ時期 (131))
- ・ 1939 実験医学研究所神経学クリニック (後に医学アカデミー神経学研究所) 実験心理学研究室長に (これは失敗と言う)
- ・ 1941 大戦とともに勤務も変わる、ウラルに 3 年、その後モスクワへ戻る
- ・ 1943 医学博士
- ・ 1945 ロシア (後にはソ連) 教育科学アカデミー通信会員
- ・ 1947 教育科学アカデミー正会員
- ・ 1950 年代 欠陥学研究所へ、1950 年代半ば (?) ブルデンコ研究所に新しいセクションをつくる
- ・ 1953 - 1959 神経外科研究所を離れ、教育科学アカデミー欠陥学研究所で異常児の心理生理学的研究を行う。

②イサク・シュピールレイン (1891 - 1941)  
彼は、先にあげたソビエト精神工学の主要人物で、ザビーナ・シュピールレインの弟である。ヴィゴツキーとは深い親交もあったようである。ここでは、上に述べた松野 (2011) の同様の資料に主に基づき、彼の生涯に係わる部分について以下に記す。彼の生涯の詳細を明らかにするのは今後の課題なのではあるが、しかし、この年譜を見てもスターリン期の粛清に巻き込まれた学者の苦難の生涯が見て取れよう。

- ・ 1917 (ドイツ在住)
- ・ 1919 妻・娘とともに帰国、グリジアのチフリリス (現トビリシ) へ
- ・ 1920 グリジア在住、ロシア代表部で通訳、ロシア共産党へ入党、モスクワへ移動、外務人民委員部海外情報担当
- ・ (1921 第 1 回科学的労働管理[NOT]全ロシアカンファレンス (モスクワ) )
- ・ 1922 中央労働研究所精神工学ラボラトリ主任、モスクワ飛行学校附属中央労働研究所試験場主任
- ・ 1923 ソ連邦労働人民委員部附属精神工学ラボを組織 (のちにモスクワ国立労働保護研究所の一部門となる) (“ブレーミヤ”連盟発足 (名誉会長レーニン、トロツキー))

- ・ (1927 労働精神生理学と職業選択に関する第 1 回全ソ連邦代表者会議 (モスクワ) を組織、ここで学会設立決議)
- ・ 1928 全ロシア精神工学と応用精神生理学協会結成され、“労働の精神生理学と精神工学”誌刊行、編集主任をつとめる (のちに“ソビエト精神工学”に改名し 1934 年まで刊行、1935 年刊行中止)
- ・ 1931・5 精神工学・応用精神生理学協会の第 1 回全ソ連邦大会、9 第 7 回国際精神工学会 (モスクワ) (革命後初めて外国人を招くもの、
- ・ 1935・1・26 逮捕、3・20 ソ連邦内務人民委員会付属・特別決議 58 条により矯正労働収容所で 5 年の刑 (1935~1937) (5 月までの 11 通の妻宛の手紙保存)、コミ自治州 (永久凍土帯) に収容、事務作業
- ・ 1936・7・20 2 回目 (?) 本人申請、“コミ共産党統制委員会シュキリャトフ同志へ” (縷々弁明)
- ・ 1937・12・26 最高軍事法廷で 10 年の刑、文通の権利なし (科学アカデミー心理学研究所“20 世紀のロシアの心理学”という本には“銃殺”と書いてある、また、“10 年の刑”と言ったら“銃殺”というのが注にある)
- ・ 1939・12 妻ポチタレフ、内務人民委員ベリヤへ申請、結局夫の消息不明のまま (この申請の存在は、1940・1・15 のポチタレフの催促状で判明)
- ・ 1956・7・26 1956/5/30 付のソ連邦最高裁の過去の判決の取消証明書交付、しかし、本人の消息は不明のまま 10/19 死亡証明書交付、1941・7・3 死去 50 歳、死亡原因及び死亡場所の記載なし (記載の要なし)
- ・ 1957・6・29 ソ連邦最高裁軍事法廷証明書で完全な名誉回復、多少の事情説明あり

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

国分 充、ヴィゴツキーと知的障害研究、障害者問題研究、査読無、37 巻 2 号、pp.47-54.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

国分 充 (KOKUBUN MITSURU)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：4 0 2 0 5 3 6 5

### (2) 連携研究者

奥住 秀之 (OKUZUMI HIDEYUKI)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：7 0 2 8 0 7 7 4